南檢箱

中

和書門
類
二五一一五號
函 九六
架 八
冊 三

内閣文庫
和書
類
二五一一五號
冊 三
函 二二三
架 九六

内閣文庫
番號 和 25115
冊數 3 (2)
函號 213 79

原本の文字など不明瞭な箇所があり

国立公文書館
National Archives of Japan

用捨箱中之巻

柳亭種彦編

【一】候べく候

昔ハ行なり次第にかきておけといふ事を。候べく候にかきておけといふ者多かりしが近年ハ稀になり適いふ者も其縁故ハ知らざるもあるめり。是ハ昔の女の文に候べく候といふ事多くありて書きなり次第に出ても讀し故それを出やうにかきておけといふ意なり

【季吟十會集】寛文十年刻

つれぬる歌の題向ハ添らまや　永垣

うらしりわくましれあ　素雲

當時の寛文書牘をてんせん料まき摸しにかきり。候べく候にならましのみといひしを
まて此諺寛文前よりありしを知るべし。宝暦頃の軽口話に候べく候を人にまぐれて多く

出女のやうにあまりふ筆きろせふ出こるけべくいの讀まじと思ひ其側ふけ置くけと
又出て再度思ふ二ツ出こを若のやうむ事りやと又傍ふけべくけい書損のけ
べくけそ陣座けべくけ脇のけべくけが本のけべくけふ陣座けべくけと書こりさそ。
此話をりて昔けけべくけと多く出こるを思へべ〜今も童の手習ふ昔ぶりの文字も
のれぞも通用の文字稀ろ諺もやうく絶るるべ〜

西山十百韻 寛文年間宗因独吟

莊老の胸より空の霧晴て
〜や吉野の花もけ置く

莊老学者の見識ふそ芳野の花も置こり決定とらひこぞ考てあるべ〜

類柑子 其角文集 享保四年刻

前句略

〜や竹手 椒皮南盛

用捨箱 中一

享保の頃の書附今ふ同此句も竹串へ巻こりふ辛皮を巻こる紙らひ〜あり

二 高燈籠

昔々物語 新見翁著ふ「昔ハ□死去〜て其年ふる七月名燈籠とふ物をこる七回忌ぞたつるもの立やうハ六月晦日長さ五六間の杉丸を上ふ三角のりうを結杉の葉ふそ包四手をきろそ付燈籠ハ辻番の行燈の形ふちひさく作上ひくき下もぞもも屋根も板ふそこ〜ら人壬間と臺所の間の廣さふ建七月朔日より晦日まで毎夜蓋六ツより明六ツまをこりを一向宗ふハ見こぞ他宗をこるく如ひ[illegible]あり」とのり是享保十八年ふ記され〜これバ既ふ當時在家の高燈籠の絶こるを明るまどこりの頃まを〜ふ狩紙〜チ考へ合をべき草紙も未見。こで。師宜ゲ画本ふ圖のり左ふ摸を

俳諧当世男 延蛍四 杉垂木ころ又六ゲ名ろ高燈籠 似春

。在家のる燈籠とふ証ふハ宗がさられど「杉の葉ふそ包」とあるふ合を

西本月並の遊び

頭書に云　前文略

玉祭りとそさまぐの珍物をその人精霊をちきうまる老若こゝ大切かけ佛名をこゝろかすむゝり

迎き頃見しるひゝ佛火

二年のうちゝる燈籠を

たかぞうろゝを

見る人の目乃

うえ火うゝ

此画本の元禄の年号なるハ後ハ彫られ申

貞享元年の刻なるべし

今も死亡者ある家ハ七月軒へ燈籠をかるハ此余波ハ高燈籠も二年ハ限る

風俗あゝ故七回忌までたつるも所と世ゝ物語ハとゝられしある歴

三角ふらゝを結四ゝをきりて付るゝ徳光人の記さるゝハ此画よく合ゝ

吉原玉屋山三郎ゝ家ハ新精霊ハかゝるゝ燈籠を出す事今ハ絶ゝ在家ハ

ゝ事ゝるハ彼家のゝるちんとゝ三亭ゝ迎年ハ雛子ハゝ故ゝる燈籠ゝハ

延宝七年刻　冨士石

元禄十九年刻　金華山録

外月ハ刻まゝゝ一人をゝさひて

郭公面影かへる　高燈籠　調枕

吉原の灯をさげさむゝる燈籠　咫尺

延宝の句ハ一人のゝあふかげ在家の燈籠ゝ享保の吟ハ山谷搖場ゝゝの寺院

の燈籠ゝゝ同ゝる燈籠の句も時代ハゝて見ゝれハ句意の解がゝき事あるべし

三　禿の菖蒲打

端午の日の印地打一変しゝゝ印地切ゝゝ正保慶安ハ頃ハ此日専童のいゝゝ

ゆゝしき事 昔々物語 ふんそう。又其りんぎを切止て菖蒲打とるれば 中古風俗志

明和元年老人筆記ふ「享保の頃までハ所〻の廣小路へ童集り菖蒲を大きなるふさきこゝ打の縄をこゝら人或ハ長竿等を持出往来の子供へあやがめくとらひて下座をさせ若下座をせざれば打かゝりなどして使ふつゝ〻る小銅市など重箱をそえされ。ふく迯かへり事などゆゝしき今ハ絶てなし」とのふ事なり。さて此菖蒲うち絶る後も吉原の禿ふのみ残り彼節句の日。江戸町分京町分と立別れ待合の街ふ出て打合を見物群集おびたゝしき彼地の事を集し雑記ふゆゝしき写しとゞめる遠ふ止ることのふ事平道揚屋町俳人が

さるふ平道没して今ハをむるふ便なし考証ふ備ふべき事ハ一ツ二ツ見出さり

上京染 享保十年乙巳 春月月並集

端午 扨とゝよ隠糸禿巻ゆや丸 左十

用捨箱 中三

又寛延元年吉原細見 里の家名記 の序ふ「初午ハ九郎助稲の祝仕舞。上巳ハ京の次郎右衛門の紋。五月五日ハ禿が菖蒲うち。七月ハ銀紙をおりふおてきの紋所を彫抜て牽牛ふ奉り」とのふ事なるどゆゝれが平道が説の如くなるしなるべし

因ニ云。おくふ思ふお歌とゆゝるハ名訓深き客の事なり是より十年の後宝暦七年七月細見の標題を 紋つくし とよびしも彼客の紋をきりて七夕ふ奉ゆゝ事のゆゝるが故ゆゝ其序ふ「扨又毎月七日の夜思ふおてきの定紋牽牛織女ふ奉り末の吹げんを待宵名月」と記して下ふ摸〻る画なり今もさる事ありや不知

四 紙帳賣 紙子賣

飛ち川 ふ曰「昔。夏近くなれば紙帳賣。冬ふなれば紙子賣とのふ物を

商ひするゞ今いまくるゝ」上巻ハ記を如く享保出生の老人の筆記なれば元文寛保の頃までハ此商人の来ッてうるべし今ハ見世棚ハ賣のこるれど其家もあれ〻のこるゞ

冨士石 延宝七年刻

雨晴て声ゆやるゝ紙帳賣　宗也

向之岡 延宝八年刻

夕立やなるゞ中あも紙帳賣　立澤

二本とも江戸の集るり延宝の頃ハ専賣ありし証ときべし彼てんそく」とハ紙衣ハ紙衣賣ゞ持きたりし狩紙衣賣ハ京師の俳諧集ゆも見えたり左ハ録を

誘心集 寛文十三年刻 種寛撰

冬雑　引ちぶや紅葉の錦紙衣賣　千之

隠蓑 延宝五

用捨箱 中四

時なる紙衣うる声　初時雨　重政

夕紅 元禄十年刻

仙蓬の浄瑠璃ゝん紙子賣　花叭

此夕紅のこゝハ冨士石と同調和撰あそ江戸の集るりされば紙衣賣ハ何岡ゆもなやゝ事必せり昔の下人ハ紙帳を鈎。紙衣を羨者おやり」質素のさま紙是ゆて思ひやるべし仙蓬浄瑠璃の事ハ下の巻ハゆり照ゆてそ見ゆべし

五 金銀を伽羅とハ陽語

昔の俳諧ハ狂言ハ過ニ佛の中間とひけ釋迦を鎗持ハ〻とを事類今のひ〻ゞとハ異なり談林の俳諧調ゆるゆ代おもむきゆりて後世ゆハ空元雅あり

空林風葉 自悦撰 天和三年刻

笑ひ新伽羅そそるや若夷　季好

年若き遊女をあるあるあり詰るんどのようより若夷を遊女ふこりあるこう是彼
輝細を給りちとまるの類なるん。さそ白意ゐ花街の陋語ふ金銀の事を
伽羅とのふ。それをりちんやとそ癸顔をつる狭とのひしそるあり

吉原かぶ

金大夫　京町　孫兵衛

あれ人ついそく男にて金張ふ〜ひけ中ふ色めん
金大夫のこ男ょ金張くきこそさんぐさこうく
ヤぐこし。こそは伽羅ふくて事をとうさゃるる伽羅
ふたちくしとうこ男いるやとそいこれぞ月八伽羅かを
こそろんなこのきゃらをこ〜ゃるみそるみいこ
ふあふきこべ伽羅の代とて金張にらこしくこ又ふかこ
るれぐきゃらこいこうこゆく金張のるりこさるる

金銀を伽羅とせし語釋にて見えたりしかるに万治二年の印本なれど此隠語はなし［空林風葉］は京師の集なればいづくの花街ともいひかたなる隠し

［吉原讃嘲記］寛文七年印本 三浦屋内せきしと云遊女を評する詞に「ある人の曰此人を山炭圏といふは色の黒きゆゑなりといふ。答て曰さにはあらず此君にふるればいかなる人も伽羅を焼たきといふ心なるべし」とありきこえし如く伽羅を焼つきは金銀をつかひつくすといふ。又。［吉原雀］寛文七年印本に「あそびもの中頃にいたりてはやる春のつかひぞきやらのどつくすべし云云「いづれの節句も大かた丸なり其日ひまなり出きてあるがつかひきやら小袖かさびらそれぐの分におさがひ前方にかかるべし」又。其角の作［吉原源氏五十四君］貞享四年 玉葛の条に「此君につきて物語りのは秋より冬にうつる頃からよ田舎の金づくさんなるが与風なりひつきいききろ味よかりもく程にそろ人なんどは小うるさくおぼえ浅からぬ心ざしもみえそゆるに持たる物をそれるきまぞりける。伽羅の一炷とか蒲団の底に

けがらはる事もなし源氏あつかはば小袖くだりの時なれどもまづきたり心がけらるゑざ」るといふ事なり［吉原雀］に「問て曰かぶとはいかに答て曰。太鼓持の異名なり」さりあらといふ心なるべし」此さうしに皆人とあるは是なり

六 荷ひ風呂

延宝八年京師の記に辻風呂云云といふ事ありそれにはめづらしく思ひしに水風呂を所々へ持あるきし事ありそれをば荷ひ水風呂といへり［川念仏］元禄十四年刻 一の巻に。ひとりの法師あり四條川原に年ひさしく住り云云の条「三条の下家ある間をかこひて一ツのすいろくをかまへたり一器のめんつに昼のわらひを残し西のきうくをふよせて大津絵の阿弥陀一ツふくをかけたれどかきたてねれば念仏はまうさず 中略 川におびて流れ枯木をひろひあつめたきけとも。身むきくれが縄手を通る三文の荷ひ水風呂といふ事あり此冊子の他にはいまだ不見侶 浄瑠璃本のチャリ場にも事あり看板の矢も…標題を…より

［紫の一本］天和 上野の花見の条に「ゆくところなきと見ゆるうちに遺佚何方へ行…

見えぞ陶く帝方く尋ねるきたるふいつの名ゐ有るくしくりけん大佛の後れ
ゑ〻ふ樣の花盛りなる其下ゐ水風呂をあくそその中へ花を入れて温泉水
なるゐうゐふ岸を洗ふとあく言づきして垢をまそて居くり。なまり悪さふ是る
氣ゲ違ひなるとの人ゐ送侠を事ゐ歌をよむ

水風呂れあるあく思ふ花れびが上野のふゐ入てゐゑとれ」

いろのなゐあくくしくりと書しふ文の曲ゐそ若辻水風呂の彼所ゐなのゐ出ゐあるゑ

慶友家集 發句狂歌集古写本 慶友の則ト養ん 万治寛文頃の吟なるべし

上野の風呂ゐそ　此ゐでゐむ風呂も我立杣木なる

とふ句もなれが如此ゐり人るなり

七 椿頬燕脂

今の少女何ゐもなれ花のちりなるを面て頬なるひい額へ唾ゐそ押戯れをる事

用捨箱 中七

なり是い頬紅をつけし頃そのまるびをるくるが頬紅廢れて後も童ゐそび
ゐ殘をしゐて茄子の皮をはゐ含て鍊將をつけるまるびをまる類あり

花おふこ 享保十四年刻 常陽撰

草足袋 賣の婦る丁々 素流
頬紅も額も椿鑒りゐ多 豆花

續清鉋 延享二年刻

犬の尾ゐ巴ゐ木曾も花と愛ぜ 撰者 千翁不角事
誰惚ゐまし椿頬ゐ 善角

椿の節頬紅ゐ似る故此戯れゐの花ゐ起しなるべし。又。水刻棹と題集
も十翁撰ありその集ゐ「花待んそれゲ金持」とふ句ゐ「似合かと油留前の
茄子鍊將」と附るなり。椿頬紅。茄子鍊將。とも対なり。さて頬紅のふくゑ

る事。漢の壽陽公主の梅花粧の事。和の菅家の幼き頃涙せられしより
そ。梅の花びらの色にも似るるなどが顔にもつくべりけり。とふを 続無名抄
延宝八年惟中著ふ引 それでも此伊歌の出所を知らざれば證といるべがたれど 和名
抄 に「經粉。釋名云經粉。和名閑延 經赤也染使赤所以著頰也」とのまべ
古くよりあやしく粧ひるるい論色 契冲曰。閑与保与通ぎ頰丹乎」此説ふよれば閑
途い頰に著るより出し名なり。又廢れたるいなと近し 後院別當の巻 に「コヲが弱
年の時享保の頃までい婦人の顔を粧ふに頰紅とらひて白粉をぬりて後。紅と白
粉を交て落紅色にしてそれを頰につけて端を散しなり如武されば顔色麗しく
見る。元文の初の頃より貴賤共に頰紅を止て白粉ばかりを落くなり或白粉を
ぬるぬるもあり何故如此するぞと人に問へれば遊女の粧ひを似るるなりといふ」とのれ
ば當時の遊女の素顔をなぞとあるるより此事の絶るるべし今乙酉前とい

用捨箱 中八

ものを画きても假面をつくりても頰を赤く隈ぎるい此余風なり

八 涙法師ある法師

人を朝ぢのやしめて法師とひ又坊。發意ともいふ。凡虫とふに通ふ。鄙吝虫。おたん
坊の類種々なり 桜ぎるに此俗語多くよりなり 散木奇歌集 連歌の部に

「十月ばかり月のあかりける夜四条の宮にまゐりて女房どもに物語して
なほびかに俄よりもてあそぶうしとありけり

空にはるぞうしとありけり

おぼれもうやと顔にかくまる」 柳亭日附ぬひ」に後頼卿へ

涙法師に今のふ泣虫。時雨を泪よりは大空にはるき出るるとのくまひしなり

又 宗長手記 大永二年の柔の俳諧に

前句 般若寺坂乃大石食ぞ

附句　心ゝるせちゑん坊や　文珠院

般若ハ智恵の事なれバ文殊。ゝ食ふせちゑん坊の四ッを附ル　下学集ニ

「世智辯　世俗悋惜之義也」とのれバせちゑん坊則今ゝ云あそん坊ゝ悋者

をゝ食のやうなりなど昔もいひ故ふかく附る事よく知る。又我子を法師と

ゝふ是ハ他ハ対して卑下の詞なり　御隨身之上記　永正九年之記「朔日御廐所へ参ル

ハ処目出度顔ゝるよ上意ゝ陽炎ひ是ハ小法師九九日夜寄なりふ誕

生ハきを法師出ハ浮事ふハ」とのるハ記者之上某男子をもうけるよろこび紙

公の戯れてのさまひ事を記しなり　同書ニ「米法師絶生ゝ後ゝ分両種二荷

云」之郎とゝふ男子のるゝひそれハ見えゝ故ニ茅法師とゝゝ又。然ハ狂言ゝ

我子の事をゝふ法師とゝふ桜ゝるふ。鍼のやうふ冷し。鉄火筋のやうふ痩し。ある

やうゝ女を鍼娘ゝるどもゝ人ゝ　後娘の事叔天神の条ニ

ゝふハ潤澤もゝく艶もゝく肉もゝ充実ふ

用捨箱　中九

譬ハゝふ河ゝそゝる法師ハ痩法師とゝふ事なるべし先達の説ふ悴ハ悴の字なり

子とゝふ義なり。やせゝれの上略なるらんと。されがゝる法師もせゝれも同意。痩法師

やせッ發意。痩坊とも通じゝふべき例なり。今男子のゝきゝるゝき坊とゝふ是なり。他

ゝりお坊様とゝふハ当ゝらぞ　さて此類の俗語ゝと多し。大ゝ發意ゝ大

男を謗ゝとゝひ一寸法師の反對なり。人影を影法師とゝふも黒くをゝけ

ゝるゝ故なり。物をゝゝられ知さまして余所ゝ見ゝる者をつんとして若とゝふ。聾耳

をつん坊とゝふ是なり。何事をゝして遂ゝる者をこ日坊主とゝふのこい主の字を添

痩法師酢好とゝふ諺も僧の事ゝハいのゝぞ。痩發意の癖ふ痩るとゝふ酢を好む

を嘲ゝるなり　草稿ゝハ三ッが見出し限りを書のせてあきゝるゝ讀人の倦ゝんを

おそれ其うち一ッ二ッを次の条ニ記す

九　掃地坊

潔癖の事を掃地坊とゝり奇麗好ふ過くるを例の嘲とゝふなり

境海草 万治三年刻

心かゝ花の梁ゆや掃地坊 長治

空林風葉 天和

煤拂 煤洗て 衣いらぬ掃地坊 可不

俳枕 寛文撰延宝刻

伯耆國名所 大山 大山や雪道分る 帚坊 一雪

掃地坊とゝふ事今いつそざる欲帚坊も同意なるべし

十 そちめん坊

そちめん坊を振とゝふ事い今もいべり 桜むるふ。そちめく坊なるべし 節用集ふ迷

瞬とゝのれども狼狽の字よく當らん歟。そちめく坊いうろ〳〵坊とゝふ程の意なり 用捨箱 中十

振い立振まひるどゝふ事ゝ或い坊を棒と思ひゝやまりて後ふ添てゝふ歟未考

洗濯物大盥 寛文六年刻 一雪撰

大和ゆそ 夕立ふそちめんゞゝをふる野ゝなる 松翁

浮世の北 元禄九年刻 可吟撰

夕立やそちめんゞゝふる門の麥 黒太

そちふ様なり。めんだうい。麺棒なり。様子ゆそ麺をつくるより出し物とゝふ附會の

説寛文前ふそやゝゝ故ふふるとゝひ〳〵歟 行脚文集 三千風著 ゆゝ。迷悟と書て立

驚く事とそ。又 挑燈ふ あとの路銀の殘をまくるを紙俄ふあるどゝきとれでいるゝゝ

とそちめんたう旅籠屋ゆより紙木賃とゝひ るどゝふ事ゝなり

十一 やんちや坊

小児の我侭ふ物るどゝひ。いぶりるをやんちやんとゝふ。彼坊を添てやんちや坊とゝくるものゝ

江戸廣小路　延宝六年刻　不卜撰

二火三火蓬ゲのとのやんちや湯　言水

富士石　延宝七

いら高数珠西風のさよやゝふちや湯　一益

十二　さられん湯

元吉原の頃よりの流言ふさられん湯とふとゆり是い遊女ふ誑され金銀をさら
ゝ湯とふ意ゝり。又さゝん湯とふの是ふ反ーて客の方へ金銀をさゝ湯へさゝん
とふゝるハ語勢。故ふさゝ湯とふひゝ事下ふさゝゝ或いさゝゝん湯或ゝさゝ
れん湯ゝど言訛音便ゆそさゝゝぐふらひ自他の混ードさゝもゝゝまゝ其原ゝ
さゝゝん湯さゝゝん湯の二ッゝり。まづ古くさゝゝる事より抄出。原吉原細見記

なづは物語　元板寛永十九年　目録ふ「さられん湯の事。たいこ持のゝ」と並出ー

豊芥子藏書

用捨箱　甲十

「やれつく金のゆるゝどさられんゝ後いかるゝぞ桶伏とゝれ」とふ狂おゝと載て左の圖ゆり

昔ハ草稿を京へのゝせて彫ーゝり此草紙の板元清兵衛

とゆるハ二條通り烏丸ゝる事色音論を元ゝり

接ゝ作者ゝ色音論と同人ゝるべー

色音論 寛永九年印本 下の巻に「あづが心も吉原に二八たりの女らの肌に白きうを小袖うへにさまざま物ぢきの及いたるごのひさち帯中略これをたち丈とまうしたり比町にのるゝひも人に異名をつるるりのとに見えたる侍の異名をいへどもられんぼあれに見えたる女郎い格子の君とまうしけり」とあり此二本い吉原旧地に在り頃は草紙へ

吉原讃嘲記 寛文七年刻 に新町九兵衛内夕勇を評する詞に「いつも花やうなる顔色にちあんざうの如く英〻しくかざりたてゝ人べあるをさそんだうのものをもあとにたりる」

さられん坊とらへべきを誤る青きをいてるざるるり。延宝二年刻 延をハ鼻毛るり。又 吉原矢筈 に「局ゆそ恐び逸るもをう〻」とあるに注に「つぎねゆそ横をきうまるをいるるべ〻るる程のさられん坊るりも横をきうまるをいるるべ〻るるいとの〻り」又「七種買役日も常よりハゆうきゝくそなるべれるなうの初音もとの外に春めきて」とあるに注に「るなう。さそんなうの事るり。或人曰ひていさられん坊るりうんそかくらふや。

用捨箱 中十二

答て曰。女郎の方へ金銀をさそん坊るり先〻」とあり多ハらふ如く當時るなゆ自他の混ドる故此語釋あり。るい取の假字初音とらふまひられてかく書〻なり

吉原大雑書 延宝三年刻 に「八橋さまゆそ酒〻ちせびたとふ小袖のちう〻ふもかきうたをを絶せつなりをもつるく殿〻さちふかりをせぶりの立姿さられん坊が白糸のよもつりれつ結ぶ縁」るどらふ事なり此本ハ 續画尽。笑泰集。松の葉二幅一対。夕負利生草等 れど同事るれが皆略く。又 娓櫻 梓彫年号欠元禄初歟 に「やりるさい道具持。ふるさい馬のをを物。を數ふいる物。ぞるん坊。さられん坊。とい唐僧の名とるろえ」とあるを花街の事を知らざる者を嘲る詞ゆそ。取。さらるの二ツを並出せり。又 日本荘子 元禄十四年刻 に「廿歳の夏より色に浮名を取るん坊とるり山谷のたるのあるに身を埋つと」

此草紙の〻取を字ゆそ書りり作者都の錦 文流とも別人 さるるに有る者故自他を謬ちぞさそ狂歌に詠るハ 卜養集 のそうゆそ未見俳諧の句ゆもをくるでい無

續山の井 寛文七年刻 季吟撰

児攝 我を心残さられんぞ 越前 古壬

京三吟 延宝六年刻

古夫の姿陽を失 けを 仙庵

ちゃうん場 吊ひ〻をんとらひ捨て 信德

二本とも撰者い京より古玄い越前より流言寛文の頃より何國やも

ゆつて〻〻るべ。又**大冬舞**の小歌ふ「東叡山の小攝場。金龍山のさうれん場」

とゝ事ゆり上野い花の名所より。攝の實をさくらん場とゝふより小攝場と人名の

やうゆひたて。金龍山い花街の通ひ路ゆる故さうれん場と對敵するゆやゆらん

十三 七色賣

昔い庚申を信ずる者おゝふ多かり〻故ゆや、庚申の日ゆい七色菓子ゆ賣来

用捨箱 中十三

り當時の人是を七色賣とのゝり **庚申秘録** ゆもてそる如く七種の供物をそ

ゆつて祭る法るふより。それを表〻る物るりとぞ **世説愚案問答** 寛保二年刻ふ曰「昔

る庚申の七色。甲子の七色とそる目一銭ゆて七色の供物を賣〻り其調へやうい

干菓子砂糖大豆せんべい掾の物を調ふさて供物の拵へやうい或い高盤せんべい

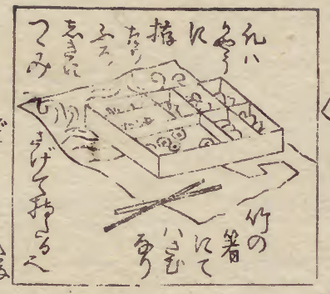
なれば ひゝるゆふ形をこゝらゝ小き箱又い文匣るどふ仕切をゆて供物を入〻り

箱の仕掾いちゆふ記を圖の如〻。外ふ袋貼布ふ銭をゆれ持

るもゆり。又箱の中ふ仕切りを大きゆゝて残を入〻るもゆり。是

も後ふ紙より包を仕切り垂の箱ふ入れる。元禄年中まぐいとゝ〻ふ

賣ゆり〻紙ふ法むやうふなりて後程るり賣ぞ」以上愚案問答



ちゆふ如く今い店ゆそ賣のそるり 備豫ぞ〻賣さる事あり 彩ふ記〻如く七色菓子ハ庚申

の供物るるぞたゆ元禄より大黒ゆも備へ今の童い天満宮ふ供さる物とのゝ思ふ

もをう―五雜組の類に庚申秘禄に曰そもそく青面金剛に七の数を用ゐる事道家の説に更
るり本朝にも慈覚和尚の七さるの歌。古書を探らば捜しつゝ尽べし―今庚申の日
ものやうちて鉄漿を含むときに七庚申つゝるのるりと婦女のひるうちにふるも七の数
るり。是を一度ゆそたくさんとまるゆれ七所の鉄漿をのとる事とぞ。初て鉄漿をふくむ
者さる事をするに謬りるらんと十は花のいろざそ七色菓子とゆ支さそ古くゆ入えを

暮紫集 万治三年刻常辰撰

七種の庚申に
ゆくりたるんを　七種や七味の菓子ふかのえ申　重以
　　七色菓子をゆるゆべし―

洛陽集 延宝八年刻

庚申夜　一説に七色賣や呼子鳥　自悦

呼子鳥に猿ゆりとゆふ説 下学集 移囂合戦 芽ふゆれば申をゆせる利にゆり

文 風流茶の浮橋 に「京新在家の事をゆふ茶に「ふるゆるどゆさゆるゆる神

用捨箱 中古

毎月七日庚申の日七色菓子の賣声も かまくく」るどゆふ事ゆり 此草紙年号を考
元禄の本るべし
○又天王寺の庚申にても縁日に彼七色菓子を賣り事ゆり是も價一文ゆり

天王寺伽藍記 明暦万治頃印本歟 庚申堂の条に「鰐口に釣てゆり是法也。又鶏つゝるも絡い
七ッに八声を聞とまうを心るり。又菓子を一銭に七色賣り一心一念の信心をゆつて云」

又 難波鑑 延宝八年刻 六の巻に「天王寺の庚申に諸国の本寺るり潤ゆる年に七庚申
あり中に納めて庚申まうでゝと群集して十二燈くゝとゆふる声も喧く七色の

菓子〳〵と賣声もいそがはしと云」とみえて此図あり童の組をかへ箸を持たるさま

「愚鈍問答」にいふよ合せ。傘をさしたる七色賣は「芦分船」延宝二年著 同三年刻 の画にもみえたり

「天王寺名所彼岸桜」貞享二年刻 豊流撰

庚申堂　七色の難題姫が思ひや歌に詠　正友

桜ちるに童謡に照天姫に一文の銭を与へ是にて七色の物を買きたれと難題をいふ

みけしらさきに歌を詠しといふ事あれば此句も彼七色を一文に賣し事をいひしや又

古浄瑠璃「をぐりの判官」万治年間印本 に照天姫。人買のてにて美濃国青墓の長がもとに

賣はなされ流れをたてざるを 遊女にならざるなり 長憤り。六ヶ所の釜の下の蒔火消さぬ

やうに焚。十八町ある所にある清水を七桶くみ来れよなど姫に難題をいひかくる条に

「長かるにも心を見んと料足七文取出し。いかに小萩 照天を名をかへて小萩といふ 此料足にて ごこう

もん。せんもん。うどんこ。かどのこ。かいらう。いちご。さて。やみの夜のつれをとこ。買て

まいれ一色違ふものあらば流れをとゞめると思ふべし。いさかしや照天の姫。料足を請

取。くどきごとこそあはれなれ。国にありし其時は片時のうちに百首の歌を詠じ

おちやあのこに至るまで唐名をつけてありけるがかく有し思へば智恵のかゞみもくもりはて

めんや唐名も忘れたよ。いやまてしばし我心。是こそやさしき唐名とて一々に買揃へ

長者殿に奉る。まづ一番に。ごかうもんとは。春のきんじめのつくし。せんもんとは。芹の事。

うどんこといふは。山芋。かどのこといふは。野老なり。かいらうとは。海老の事。いちごと出て。ひと

わごなり。の儀。さて闇の夜のつれ男は。そのなたでかくではござる欤 小数原といふ ざまめをいふ 流れをたてし

まれや。長者此由御覧じていかさまに此姫はよしある者と見えてある情をかけて

つかへんと十六人の下の水仕はちとまぬかへさとおひあるし情をかけてつかへ」と見え 古に掛出まる ちゝや姫の条

されば是によりたる欤さまれかくまれ七色菓子の句ある事は論なかるべし

今説経浄るりに傳たり「彼の七人のつれ男大和の田作より ざまめの事ではござるまいか」と語りそのやう異同ありとぞ

○因ゐ記雑談と見流しゐ。澁谷道玄坂をのぼりこ軒茶屋への路。中目黒のうちゐべ〜右の方小高き地ゐ氷川明神の社ゐり其左ゐ延宝八庚申年と彫る彼青面金剛の石像へ堂とゐ程ゐもゐ〜ぬ仮の雨覆ひをゐ〜浮世袋ゐ入て猿沢池ゐ納めゐり〜を十年ならり若ゐ見てゐり

出来舞京土産

寛文四年作
延宝五年刻ゐ

「三條通大橋東。白河橋よりゐ東。こ申の社ゐり――――ゐんどゐひとやらに。美〜き浮世袋をゐけ。色よきゐ袖きせ。十二燈洗米御供ゐんど備ふ」とゐるゐ合考ふるゐ古ゐ浮世袋の事のゐへど若彼括猿も庚申ゐをきむゐ原ゐそれが洗禽の神へ移〜欤と思ふる。友人曰真言の壇門俗ゐ云ゴマダンの金剛橛四方の柱ゐり掛る金剛寶幢とゐゐ物あり安祥寺の錦をゐて火形をかさぎりこ角ゐ縋。裏ゐ香をゐ〜又ゐれぎも浮世袋其形ゐ似ゐる故寶幢ゐゐるべらくて神佛ゐさ〜ぐゐゐべ〜。此説ゐよれば金剛の名ゐ因て浮世袋ゐ庚申ゐ納め〜が起原ゐやゐらん

用捨箱 中十六

十四 誰袖 花袋

誰袖ハ匂ひ袋ゐり紐をつけて二ッ連ゐ今袂落〜とゐ物の如く〜て持〜故ゐ古画の誰袖ゐ紐のつぎゐる〜。是ハ原「色よりも香こそなつかしけれ誰袖ふれし宿乃梅ぞも」とゐゐ古今集の歌ゐて名づけ〜ゐれが楊枝さ〜とゐそハ名義ゐ文ぞ其ハ香具賣ゐ拵来。見世店ゐても賣ゐるゐり。誰袖を匂ひ袋ゐり〜とゐふ証ゐ左ゐ其ニッ四ッを記ゐ

老婆物語

寛文四年印本 下御霊の条ゐ「矢田の地蔵のおをのゐりゐそこら見世棚ゐ並むまぶ。かざりたてゐる小ゐる物のゐ〜。ゐと愛ら〜くゐれけゐる印籠巾着。針さ〜櫛かうゐ。誰袖。れ〜ゐゐひの具ゐ梅花ぞうゐ」又

卜養狂ゐ集

犬の誰袖ゐつゐをゐ入て引こゐろをかいゐる者ゐ

天和二年の写本より抄出印本とゐ小異あり

かゐて出るゐゐひもゐ〜たゐ袖とひけど君ゐ犬のつ〜ゆく

同集ゐ又

若き香具屋ゐゐりて及ゐの香具を出〜ける略中伽羅。たゐ袖。花の露。匂ひ

代袋などゝ申すとのひられべ云云」

女重宝記 元禄五年印本「白袋 誰袖 白玉 香包」とあり

是等の圖おもくあり。又「香のかをり」一名白菊物語 元禄八年刻ハ「梅花黒方などのたき物。麝香。龍腦の誰袖云云」又「宝の市」と題せる樂山點の前句附。桂木とゝ者の句ハ「梅ゞ香ハ誰袖捨る霜の朝」とゝ元禄十六年ハ 句ハ袋る事よく哀ハ是ハ思ふ今婦女子の細工物とゝ大方香嚢るべし。まづ。貝張ハ香貝欄

「例記」室町家之日記 正月十一日の条「御所ゝゝへの所ゝやげん。ちぎ板。ちぎのこ。白貝已下 年中定

□□□ 撰八句前菊」とあり。羽子板。羽根。貝張とゝ程の事とゝ。白貝の事ハ是

より古くもあらんか。貝張とゝ物近き草紙ゆもあり。見えぬ

向之圖 延宝八

汐干

張子貝 ちよや千源八 錦の浦 調南

此白貝張をいひ〜るべし。又花形の獨樂も原ハ香嚢也花袋とゝく〜物ゆあり

ちよや。花袋の句ハ万治前後の俳書ゆ多くあれども証とすべきを二句録せ

花月千句　慶安三年刻　立圃門

白ふら〳〵山懐の花ふく物　幸和

誘心集　寛文十三年刻　改元延宝元年

種寛撰

かけ香炉草乃袂の花袋　一春

花袋の白袋なる事明あり。再梅ぢるふ浮世袋も白袋なるべし。こ角ふ縫て組とつけなる白袋の看板近年までのこり。今もあるか不知　茅ふらひ〳〵誰袖の彼こ角なる形も見ふる〳〵なるが故それを精工ふそなるなり。偖。小女の是等の物を調ぢるる把針手業をなる〳〵ふあなれが費をいとひて香類をられざるべしとなり。誰袖ハ楊枝さし

と変。花袋の獨樂とあそ。香貝ハガラくとふ物のやうふなり。浮世袋ハ何とも

若づけ雑き物とるやう〳〵ふやならん。浮世袋ハ女女のまもとびふ縫〳〵とふ證

富士石　延宝九

用捨箱　中十八

衣配　女の童うき世袋やゝ衣配ゝ友也

歳暮の白ゐれば屠蘇袋の料ふ送をらひ〳〵欲

崑山集　慶安四

花々のつぼをいうき世袋うふ　作者不知

代白　後砂金袋　ふ上の五文字咲花のトなり

玉手箱　延宝四

見まゞ氣のうきよ袋や花袋　女香屋

茶の白ハ花の香とふくゝ白袋なるをらひ〳〵欲。後の白ハ香毒袋を二ツ並べてらひ〳〵欲。録して後勘ふ備ふ。ぜ不るふも浮世袋の白ゐれども考証ふ便なる〳〵故ふ略く

○毛吹草　附合指南ふ「袋。傘。弓。浮世。乞食」と見えゝるは寛永より

浮世袋を云ふり　傘袋。弓袋。浮世袋。乞食袋と附方を数へ也　又世話盡　義義三年　同指南ふ「浮世。月蝕中着。戯女」と記ゝ。義應より浮世中着とふ物なり。浮世中着ハ桔梗

袋とりの物の類あれども浮世袋とは別物なるべし

十五 土手節 加賀節

昔こ谷通ひする者の歌ひしを云ふ節とかいふ今流行する踊と歌吉原雀ふ。それ編笠立もそこふあり云云とのべる家の節なり。此吉原雀の歌初て作りしとき當時こ張の高名原富翁の唱歌を見られ。あく昔流行せしを云ふ節こそ

ふかくめとるをくさされしるをとも 桜こ翁ハ宝永六年の生 その翁の門人の門人小林某文化丙寅のこ月まで予が合壁ふ住。のちふ節を弾歌ふ紙ふ書ふ唱歌いこゞるう

でハ病さるを一歌い 松の葉 この巻ふ見えざる谷飯りとかいさうを欲らしきい云云

ふ大同小異なれども不載其二歌

○前ふハ面白かるこゞ今日いでとやう物淋しを呼ふやらうを。者をびん

戎招ごう狭。ぜんどやうしき物がある。何ぞ。一口茄子ふ紅のけらをあて

用捨箱 中 十九

者。何所へ。船病ふいきさと可ふ恐智恵ごを分別ハるらく。祢ッかるらく

ゑ者やりきうさるいよサ。さかく憂路ハ氣がゆめる

○前夜色里でなる小歌どるらふこ。ひとさア きハ覚えるんぐゞ中のところる

忘れくさアこそあるべれとそ書て世貝くゞそれさ人出口へおいて者こ義理も諸

分も此通りめんゞくるのくかん者やりきうさるいよサ。以下茶こ同こ

野俗なる唱歌なるがゝ古雅なり。此りとつを。者をびんとかいふ事不解歌ふ人ふ問ども

不知。近曾与風なりふ。ととつをハ綿摘なり。写本 吉原つれく草 宝永年間ふ 傾城よろ

茶屋りのいおこり。茶屋者ろり。綿摘ハおとり。綿つをとろ 比丘尼ハおこりを云 とかい

事ハり。者をすびんハ。儒子鬢。ゆて比丘尼の事なるべし 儒子の頭巾を髪ふ替ると

ひよ意ゆて陰ーなるをとびるとおもふる。此二歌ふるき草紙ゆそハ未見

雑話聞見録 文化年間編 作者不知写本

元禄の頃えやすーつぎ脇しーとゆふ歌

○やべ色里でえやる小節をあらかた後さ知いかがえるんざが中の小節を忘（ウタトヨム歌）
まてさこそ物なるべいこそ書てりらふくさを。ちをへをちんと落イと義理も諸分
も此通り面目ゐい。一口茄子の喰さしふ紅のついさを落イさ。ざこへ。船宿へ
からそ来こでぐでぐでうを智恵ざを分別せいなのやうこ」
とゆふ歌を載こりこ子がおそえ二歌を混じて次節も歌ひう次節又次歌とゆふ

武蔵曲　天和二年刻　千春撰

道世の余所ふ妻子をのぞき見て　芭蕉
つぎ〻〻　耳ふ殘ふ吉原　峡水

又吉原つぎ草　貞享年間作　元禄二年刻ふ「かぐぶーつぎぶーの小歌を色糸ふ弾う子」と
ゆふ事ゐどなのれが吉原ふそふく流行ーー小歌ゐる事ゆ明ゐれど精細ゆ未考ゆ

用格箱　中二十

洞房語園ふ載こゐる。かゐる二谷の草深ゐれざ。とゆふ古ゐ節の歌ゆ。ニカ世ーーこゐる節
の二弦ふ今ざ名ゆひとーーくてさをぐふ歌ひーーの欲

○ゐふ引ーー　つぎ草ふつぎ節と並べてゆひーーかぐ節ゆ誰こも知る其角の撰

虚栗集ふ天和三年

二谷吟行　詩　式加賀ふやこうぐ蛙の那　枫臾

とゆるより吉原のこふそのこやり小歌と思ゆ人もゆるめれど是ゆゆくゆそも
歌ひーーゐゐり　昔々物語ふ「六七十年以前　享保十八年より七十年前　寛文四年也」の昔。祢宜町の狂言
座中村勘三郎座ふて。多門兵左衛つ。野良ふ。出来源小ざてし。花井支二郎。
玉村吉弥。玉川千こ丞。山川内記。玉川主膳　是等かゐれるき美男。柏子きての
声よき者ゐり。足芽寄合て加賀節とゆふ歌をここひ出き中略その引つぎふ。梅
妻貴船
ざつま。きぶ。ゐどこゆふ長歌も此者でる作り出ーーこり」梅ゆ妻の事下巻ふ有り印本ふ
むめこ。ききこ。とゆふ誤り此

説ふよれば加賀節いかぶき者の歌ひ出しくるり

國町の海汰 延宝二年写本ふ。隅田川を船あそびの事をよふ条ふ「此頃さえ物る猶都とふ座頭をこの世近江ぐうちー紫檀の三味線金の鵐目ありるるきうふ忍だ世。せーつるの舟乃さえをがちなる音ドミふ銀のかせ掛。誰をかる氣色もあり。撥音けざくおやぐふ弾る巳。其空蟬の殼をかへて狂人かうのなりーやとうふ加賀節いさーも清川の流もの水を酌しかとあのやすくる」とあるそ注ふ「かぶーあとふりーるとりんど今ふ廢らどおこーふ大事」とあえくり延宝二年ふ事ふるーとあるあて寛文中の小歌るる式紀るべー。又

天和笑委集 三年五年之記 堺町の事をよふ条ふ「法師海門此道ふあづこさふらんば戈智学智を失ひ中略諸經ぐ者の音声をひきかん。らうさふ加賀ぶーさんがうやうのをそうもるき。たやり小歌をうくひ」さんがう節の唱歌松の葉ふ葉ふ有り

又近く

京大坂茶屋雀 元禄六年ふ。ふやまの歌ふふの名寄あり其うちふ「りせ節。

加賀節。さんさ節。ぶくこのえ節 云云」とあるまべ有ふふ如くらづくやそも狭ひーあり。又

西鶴置土産 元禄六年ふ「連節のゆ今加賀」とよふ事あり元禄の頃い節もくらへ変ぎるるるべー。備。加賀節の唱歌ハ

松の葉 **續松の葉** ふええくとどる用るるれば録せど。又

紫一本 **姥捨** **庵子ぐるー** **洞房語圓** 等ふも加賀節の事あり

十六 質屋の看板

昔ハ質屋ふ看板あり。將棋の駒の形ぎる板を組そ為る。その板のうへふ質札の反古を。紙の塵えさきの如く束ぐる物る。其板をかる事止て後ハ彼塵えさきかぎくる物とのをるれり。是ハ京師ふ今もありと申り。夫故やらん近きかる草紙の画ゆもをりくく見ゆれど板札をかきたるハ稀る。或人の曰。昔ハ謎語のやうある看板ふかくあり。將棋の駒の形るハ。金ふる。金銀ふかへるるどの人意るらん歟。

予三十年前友人の家ふ伝来の看板を写しあきくり縮圖しを左ふ出さ

京都板の色彩ホ圖ヨリ見れば此看板江戸ホかぎりしもの
画巻ハ紙を下へつけさり軒へひきく彩る故出入人ホ天窓をくくせ下の用心欲質札の反古ホ
ちきさまゆそ胡粉ホそ白く隈ぞりしを他圖ホ今も質屋の看板種ヨリ圖を得るもあれど考へ足ざるものあるホ不載

十七　鎮鍮屋の金魚

江戸康子　貞享四年に「金魚屋。下谷池之端。あんちう屋重左衛門」と記し又同所に「地張きせる屋。あんちう屋。市郎右衛門」とあれば重左衛門も原の烟管屋なるべし

向之岡　延宝八

納涼

影涼し金魚の光り鎮鍮屋　調艶

延宝中より名高き金魚商人なりし事此句にて知らる　西鶴置土産　元禄六年印本二の巻に「上野の橋を云黒門より池の端を西へ行く金魚銀魚を賣者あり」と庭に生舟七八十も並べて酒水清く浮藻をそれらの潜て泳ぐ」とある事あり　西鶴の羅波人多しが多く名を誤りし歟　今いうる商人の住雖き繁花の地とあるべし

再云此置土産の目録に「金魚の狂言もあり」とある事あり是より前元禄紀年に刊行せし風流盛衰記に「又の日は金魚を生舟にのせて狂言をさせけり」是もつひ用捨箱中堂

水にふるしと」とある事又あり。按るに金魚の狂言とは彼魚水中に宛轉し踊り狂ふさまをいふ事なり。今菓を捻る者狂ひ咲して花形の変ずるを義経がのるとなん類あらん此事發句にも古く見えたり左に抄出

新續犬筑波集　万治三年季吟撰　寛文七年刻

をどるや狂言金魚秋の水　松滴

十八　物茂賞て伽羅維とかや

昔の伽羅を愛する事今に過しより其故に香ある物を賞るを伽羅とかし事最も甚しかりしが幼きころの老人にも今の俗世事とかふとかふ事を伽羅をかふ世事者と伽羅者とかふりのかりし。思ふに伽羅小左衛門。伽羅休慶などかふ昔の輩間も自称にかりしなる意にて初め他より名づけしなるべし。偖伽羅とかふ泥古く見えたるは鳥籠物語正保年間著写本に「是もめでたき御代なると上をかぐにて下さまの

安きをもとゝお心さゝ人實ありがときき物語りおんのうちをやすべき伽羅の道をや
樂言まうさん」とあり。伽羅の道い正き道。直る道とゝ程の事なり

延宝六年
露言歳旦帳　此句 富士石 ゝ又あり

國厚う千代のつやあり伽羅の春　露言

五の春とゝふべきを伽羅ゝかゝへり。國厚ゝこゝのれば正き春とゝふ意をもふくみ云歟

貝おゝひ　寛文十二年　松尾宗房撰

ゝゝひなる声や伽羅節うゝひ初　三木

程拍子のてのひら節ゝゝなる所〳〵

隱蓑　延宝五

立姿世界の伽羅よりゝ乃春　蘭

袖ゝれ〳〵ごとの伽羅ゝ梅の花　かゝ野

用捨箱　中巻

容貌の艶る式伽羅ゝ様をゝてゝゝが當時の女河欲の作者ゝゝれも女ゝ世界とゝも又昔の流言。世界ゝ又とゝるまゝとゝゝ意ゝ。又 貞女白垢 貞享三年印本 五の巻ゝ「何某の定村とゝふゝり妻室ゝ同家中の息女。又外ゝおりゝのを隔〳〵て通ひ〳〵が妻の女房恨む事色此後妾を本宅ゝられてゝゝきりてゝるせどもゝゝ恨ゝゝど下つゝの男女ゝゝひがひゝるの奥のゝ心やりどゝかゝやとゝゝど心ゝる人ゝ物の種ゝゝゝゝづゝゝれ實梅檀の若生かゝると感じゝる。是より本妻を伽羅の師匠と異名〳〵。妾の名を狗燈籠と欺くゝゝのびられて光りゝのとゝゝ事ゝるべし」ゝゝゝ狗燈籠の語釋をゝひて本妻の異名ゝ語釋ゝゝきを見ゝゝゝ昔人ゝ伽羅の方とゝひて操正〳〵く心直ゝる事と学ゝ〳〵ゝるべし。古き草紙ゝ伽羅の橋。伽羅の下駄ゝどゝゝ事ゝゝり是も唯賞ゝゝるまゝゝゝ。俗語ゝゝゝて。結構ゝる擣。結構ゝる下駄ゝり。伽羅落。伽羅牛房ゝ昔よりの名ゝゝるべし。今香ひゝるき物を伽羅とゝゝゝゝゝゝゝ欲

十九 師走坊主

近松門左衛門作の夕霧の浄瑠璃に 傾城阿波の鳴戸 と題せり。吉田屋内段。

伊左衛門の詞に「紙衣さへなくば破れる袴の上に引ケたる跡ふまんと師走坊主。

きさまと浪人」とあり姿やつれくしく便りなげなる者をさして師走坊主。きさまも

浪人とは諺の昔ありし故ふかくつけて書きるあり盆に僧の物ゝらふ事

もきるまじく藏をゆいさる事もきるまじとか

落花集 寛文十一年刻 以仙撰

佛名

佛名を唱へに師走坊主ゝ多 勝正

此諺に實の僧の事をいふ記しる。坊主をどらふとも違り。今の浄瑠

璃本に師走坊主とゝふ事に略す

用捨箱中之巻

用捨箱 中 廿三

国立公文書館
National Archives of Japan